

A 基礎 春と夏の景色

答えと考え方

問1 歴史的仮名遣い

答え ようよう

解説 「やう」を「よう」に直す。意味の「だんだん」と書くのは指示に合わない。

問2 歴史的仮名遣い

答え なお

解説 語の途中・終わりの「ほ」が、この語では「お」となる。

問3 時を表す語

答え イ

解説 「あけぼの」は夜が明けていくころ。秋の「夕暮」と取り違えないようにする。

問4 描写の対象

答え 雲

解説 「紫だちたる」がすぐ後の「雲」を説明している。山や空全体を直接そう呼んでいるわけではない。

確認 指定に合う表記・内容であること。

問5 動作と形

解答例 細く横に長くかかっている。(13字)

解説 「たなびく」は雲などが横に長く引く様子。「紫だちたる」は色を表すので、ここでは形に着目する。

確認 細く／横に長くかかる、の2点。

A 基礎 春と夏の景色 続き

答えと考え方

問6 古語

答え エ

解説 「さらなり」は言うまでもない、もちろんだという意味。月明かりのある夜のよさを当然のものとして示す。

問7 省略された主語

答え 蛍

解説 前に出た「蛍」が引き続き話題となる。月が一つ二つ飛んでいくのではない。

問8 作者の評価

答え ウ

解説 作者は月の夜に加え、蛍のいる闇夜も、雨の夜も趣があるとしている。条件を一つに限定していない。

本文の現代語訳

① 春は明け方がよい。山に接する空がだんだん白んでいき、少し明るくなって、紫がかった雲が細く横に長くかかっている様子がよい。

② 夏は夜がよい。月が出ている夜のよさはもちろんである。月のない暗い夜も、蛍がたくさん飛び交っているのがよい。また、わずか一つ二つほどの蛍が、かすかに光りながら飛んでいくのも趣がある。雨などが降るのも趣がある。

B 標準 秋の視点の移り変わり

答えと考え方

問1 歴史的仮名遣い

答え さえ

解説 語末の「へ」を「え」に直す。意味を説明する問題ではない。

問2 古語と評価

答え ア

解説 ここでは鳥が寝場所へ急ぐ姿に、しみじみと心を動かされる感じを表す。悲惨で気の毒という意味に限定しない。

問3 動作の目的

解答例 寝る場所へ行くため。（10字）

解説 「寝どころへ行く」とて」が目的。「とて」はこの文脈では、行こうとして、というつながりになる。

別解・許容 ねぐらへ向かうため。

確認 指定に合う表記・内容であること。

問4 数の描写

解答例 一緒に飛んでいく鳥の数。

解説 直前の「鳥」を受ける。雁の列の数や空の雲の数を表しているのではない。

別解・許容 鳥の数／一つのまとまりで飛ぶ鳥の羽数。

問5 情景の把握

答え エ

解説 列になった雁が小さく見えるので、遠くを飛ぶ景色が想像できる。雁の体が縮んだのではない。

B 標準 秋の視点の移り変わり 続き

答えと考え方

問6 抜き出し

答え 日入りはてて

解説 「入りはてて」はすっかり沈んで、という意味。日が沈みきった段階に進んだことが分かる。

確認 指定に合う表記・内容であること。

問7 感覚の違い

解答例 鳥や雁などの目に見える姿から、風の音や虫の声など耳で聞くものへ変わる。 (35字)

解説 前は夕日や鳥を視覚で捉え、後は風や虫を音で捉える。具体例と感覚の違いを合わせて書く。

別解・許容 夕日や鳥の様子を見ることから、風や虫の音を聞くことへ移っている。

確認 前の景色の具体例／後の音の具体例／視覚から聴覚への変化。

問8 現代語訳

解答例 風の音や虫の声なども、趣があるのは言うまでもない。

解説 「言ふべきにあらず」は、ここでは口に出してはいけないという禁止ではなく、言うまでもないという強い肯定になる。

別解・許容 風の音、虫の声などのすばらしさも、言うまでもない。

本文の現代語訳

① 秋は夕暮れがよい。夕日が差し、山の稜線にたいへん近くなったころ、鳥が寝る場所へ向かおうとして、三羽四羽、二羽三羽と急いで飛んでいく様子さえしみじみと心にしみる。まして、雁などが列になっているのが非常に小さく見えるのは、とても趣がある。日がすっかり沈んでからの風の音や虫の声などのよさは、これも言うまでもない。

C 応用 冬の朝と昼の対照

答えと考え方

問1 古語

解答例 早朝

解説 ここでは朝早い時間を指す。「一生懸命に」という現代語の「努めて」とは違う。

別解・許容 朝早く／朝早いころ

問2 指示内容

解答例 雪が降り積もっていることと、霜が真っ白になっていること。

解説 直前の霜だけでなく、その前の雪も合わせて受ける。雪も霜もなくとも寒い朝に趣がある、という流れである。

別解・許容 雪が降っている状態と、霜が白く降りている状態。

問3 人物の行動

解答例 火を急いでおこすこと。炭を運ぶこと。

解説 「火など急ぎおこして」と「炭持てわたる」を動作ごとに分ける。雪遊びなどは書かれていない。

別解・許容 火をおこす。炭を持っていく。

問4 古語

答え ウ

解説 その場面に似合っている、ふさわしいという意味。寒い冬の朝と、人が火をおこして炭を運ぶ様子の組合せに注目する。

問5 評価の抜き出し

答え わろし

解説 肯定的な評価が続いた後、末尾の「わろし」で評価の向きが変わる。

確認 指定に合う表記・内容であること。

C 応用 冬の朝と昼の対照 続き

答えと考え方

問6 変化の順序

答え イ

解説 昼になると寒さがゆるみ、火桶の火も白い灰の多い状態になる。朝の寒さと火をおこす動作とを区別する。

問7 対照の説明

解答例 寒い朝に火をおこし炭を運ぶ姿はふさわしく、昼に灰がちになる様子はよくないとする。(40字)

解説 朝の行動と昼の状態を並べ、それぞれの評価を添える。「朝はよく、昼は悪い」だけでは根拠が足りない。

別解・許容 朝、寒さの中で火をおこす姿に趣を感じるが、昼の灰の多い火桶はよくないと感じる。

確認 朝の具体的様子と肯定／昼の具体的様子と否定、の対照。

問8 作者の見方

答え ア

解説 雪・霜という自然だけでなく、火をおこす人の暮らしにも目を向け、昼の変化で評価を分けている。

本文の現代語訳

① 冬は早朝がよい。雪が降り積もっている時のよさは言うまでもない。霜が真っ白な時もよい。また雪や霜がなくても、たいへん寒い時に急いで火をおこし、炭を運んでいくのも、冬の朝にふさわしい。昼になって寒さがだんだんゆるんでくると、火桶の火も白い灰の多い状態になって、よくない。

D 確認テスト 四季を読み比べる

確認テスト 100点 採点基準付き

問1 歴史的仮名遣い〔10点〕

答え ちがい

解説 「ひ」を「い」に直す。意味の「行き交う」ではなく指定された部分の表記を書く。

採点 ちがいで10点。

問2 語句と時間〔10点〕

解答例 あけぼの＝明け方。つとめて＝早朝。

解説 どちらも朝に関わるが、語として「あけぼの」は夜が明けるころ、「つとめて」は朝早くを指す。

別解・許容 夜明けごろ／朝早いころ

採点 あけぼの5点／つとめて5点。

問3 古語〔10点〕

解答例 趣がある

解説 蛩や雁の景色に心を引かれるという、よい評価を表している。滑稽だというだけの意味にしない。

別解・許容 風情がある／興味がある

採点 趣・風情があると分かれば10点。「おかしい」だけは0点。

問4 描写の対象〔10点〕

解答例 烏、雁

解説 どちらも鳥だが、近くの少数の烏と、遠くで列になった雁を分けて描いている。

別解・許容 からす、かり

採点 烏5点／雁5点。

D 確認テスト 四季を読み比べる 続き

確認テスト 100点 採点基準付き

問5 比較〔15点〕

解答例 多くの蛍が飛び交う場面と、一つ二つの蛍がかすかに光って飛ぶ場面。（32字）

解説 「多く飛びちがひたる」と「ただ一つ二つ」「ほのかにうち光りて」を一組ずつまとめる。

別解・許容 蛍が多数飛ぶ様子と、少数の蛍がほのかに光りながら行く様子。

採点 多数の蛍が飛び交う6点／一つ二つ4点／かすかな光5点。

問6 現代語訳〔15点〕

解答例 紫がかった雲が、細く横に長くかかっている。

解説 「紫だつ」は紫がかかる。「雲の」の「の」は、この箇所では主語を示す「が」に当たる。

別解・許容 紫色を帯びた雲が、細く横へ長く引いている。

採点 紫がかかる5点／雲が5点／細く横に長くかかる5点。

問7 指示と評価〔15点〕

解答例 寒い朝、急いで火をおこして、炭を運んでいる様子。（24字）

解説 「さらでも」の後を読み、寒い朝という条件と、人の二つの行動をまとめる。

別解・許容 とても寒い中で、火を急いでおこし、炭を持ち運ぶ様子。

採点 寒い朝・寒い中5点／火を急いでおこす5点／炭を運ぶ5点。

問8 文章全体の特徴〔15点〕

答え エ

解説 季節ごとの好ましい時を示した上で、見える景色や音、人の動きなどを取り上げ、作者の感じ方を伝えている。

採点 エで15点。

本文の現代語訳

① 春は明け方がよい。山に接する空がだんだん白んでいき、少し明るくなって、紫がかった雲が細く横に長くかかっている様子がよい。

D 確認テスト 四季を読み比べる 続き

訳の続き

② 夏は夜がよい。月が出ている夜のよさはもちろんである。月のない暗い夜も、蛍がたくさん飛び交っているのがよい。また、わずか一つ二つほどの蛍が、かすかに光りながら飛んでいくのも趣がある。雨などが降るのも趣がある。

③ 秋は夕暮れがよい。夕日が差し、山の稜線にたいへん近くなったころ、鳥が寝る場所へ向かおうとして、三羽四羽、二羽三羽と急いで飛んでいく様子さえしみじみと心にしみる。まして、雁などが列になっているのが非常に小さく見えるのは、とても趣がある。日がすっかり沈んでからの風の音や虫の声などのよさは、これも言うまでもない。

④ 冬は早朝がよい。雪が降り積もっている時のよさは言うまでもない。霜が真っ白な時もよい。また雪や霜がなくても、たいへん寒い時に急いで火をおこし、炭を運んでいくのも、冬の朝にふさわしい。昼になって寒さがだんだんゆるんでくると、火桶の火も白い灰の多い状態になって、よくない。